

すると、赤井・荻野・内藤氏ら丹波国衆は義昭に通じて、信長から離反した。対する信長は、天正3年（1575）、明智光秀を大将とする丹波攻めを開始した。はじめ、秀治は光秀に味方して出陣したが、翌年正月15日、にわかに秀治は荻原直正に通じると光秀軍を敗走させた。

苦杯を味わった光秀がふたたび丹波に兵を進めたのは天正5年(1577)10月のことで、前回の失敗に懲りた光秀は八上城の周間に付け城(陣城)を築いて、徹底した包囲作戦を布いた。秀治も新たに曲輪を築くなどして八上城を修築、明智勢を迎撃つた。両軍、激しい戦いが繰り広げられたが、光秀方の徹底した包囲戦によって八上城内は飢餓状態を呈した。天正7年(1579)6月、秀治ら波多野三兄弟は城内の路地で捕えられ、光秀のもとに差し出されたのであった。安土の織田信長のもとに送られた三兄弟は、信長の命によって安土城下の慈恩寺において磔の刑に処され、戦国大名波多野氏は滅亡した。

## 波多野氏の家紋



波多野氏の家紋は、幕府評定衆で藤原秀郷流越前波多野氏の家紋「鳳凰に堅二つ引両」が『見聞諸家紋』に収録されている。一方、丹波波多野氏の家紋はといえば、

「丸に出十字（出くつわ とも）」というのが受け入れられている。

波多野秀治が將軍足利義輝の遺見覚山天誉上人を開山に迎えて造営、寄進した誓願寺では、「丸に豎二つ引き両」「丸に出十字」が寺紋として用いられ、境内の墓地にある波多野秀治の墓所には「丸に出十字」の紋が刻まれている。また、『多紀郷土史考』に紹介されている波多野秀治の位牌に据えられた紋も「丸に出十字」で、キリシタンとの関係から十字紋を用いるようになったのではないかという説もなされている。

このように丹波波多野氏は、キリシタンのことはおくとして、家紋からは藤原氏流波多野氏とは別流と思われ、「二つ引き両」紋を用いる石見吉見氏の後裔とする説が真実味を帯びてくる。

3

5

八上城跡へのアクセスご案内

JR 篠山口駅・舞鶴若狭自動車道より  
八上城跡登山口まで約 8 km



### 電車・バスで来られる場合

JR 福知山線（JR 宝塚線）「篠山口駅」下車、  
神姫グリーンバス福住行「重兵衛茶屋停」下車徒步  
・バス時刻は、神姫グリーンバス篠山営業所  
(電話：079-552-1157)まで

#### 自動車で来られる場合

舞鶴若狭自動車道「丹南篠山口 IC」から東へ約 20 分、または、京都縦貫自動車道「千代川 IC」から約 1 時間。

#### ボランティアガイド・レンタサイクルのご案内

發行：篠山市・篠山市教育委員会

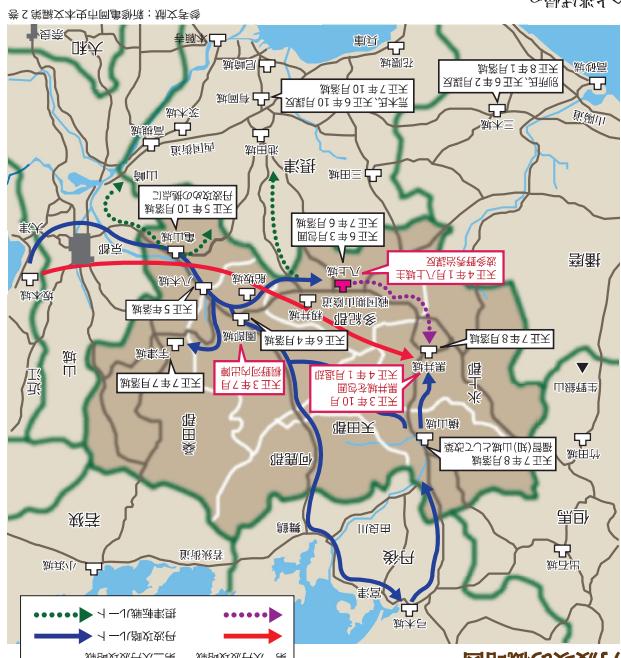
〒669-2397 兵庫県篠山市北新町 4  
電話：079-552-1111

企画・編集・制作：一般社団法人ノオト（田中 豊臣）

1

秀治力光秀力公卿反、大歎北を嘆ル尤光秀伏原八幡井掛

This photograph captures a wide-angle landscape of a lake nestled among mountains. The water in the foreground is calm, reflecting the surrounding greenery and rocky terrain. In the middle ground, a small town or cluster of buildings is visible at the base of the hills. The background features towering, rugged mountains covered in dense forests. A stone wall runs along the right side of the frame, partially obscuring the view. The overall scene is one of natural beauty and tranquility.



# 丹波戦国史を刻む—八上城跡



## 城史、城跡遺構とともに我が国有数の戦国山城

国指定史跡一八上城跡は、「丹波富士」と称される高城山(標高462m)に築かれた八上城を本城として、奥谷の城下を挟んで法光寺山の法光寺城を支城とする東西3kmに及ぶ大規模な中世山城である。高城山北麓は古山陰道が東西に通じ、15世紀前半代郡奉行の在庁する守護所が置かれるなど、多紀郡の中心地であった。

丹波に下向した波多野氏は、はじめ奥谷城(蕪丸)を構え、勢力を拡大するとともに篠山盆地を見下ろす高城山山上に新たに城を構えた。『細川両家記』などによれば、大永6年(1526)に「矢上城」とあり、このころには築城されていたようだ。当時、波多野氏は元清が弟柳本賢治とともに管領細川高国に叛旗を翻した時期にあたり、元清は高国の軍勢を堅固に築き上げた八上城で迎撃した。以後、八上城は波多野氏の本城として、三好長慶との10年近い攻防、織田信長の命を受けた明智光秀の丹波攻めなどの戦いのなかで改修を重ねられ、いまに残る姿になったようだ。

本城である八上城跡の遺構群は、山上の主郭部、東北尾根筋の曲輪群、そして、奥谷城の三区画に分けられる。その規模は東西800メートル、南北400メートルに及び、丹波随の一

戦国大名波多野氏にふさわしい戦国山城である。

山頂の主郭部は本丸を中心として、連郭式の曲輪群が有機的に配され、本丸、右衛門丸などの一部に石垣も残っている。本丸より東南方向には土塁で防御した蔵屋敷、番所、大堅堀を経て朝路池のある南曲輪群が構えられている。さらに、奥谷城へと続く南斜面の中腹に大規模な平坦地があり、八上城の重要な兵站基地であったと考えられている。

東北に伸びる尾根筋には、茶屋の壇と呼ばれる大曲輪、馬廻場、丸、西蔵丸が続き、尾根筋には堅堀が数条落とされている。全体的に削平も甘く、自然地形を呈しているが、三好氏、明智氏との戦いに対して整備、拡張されたもので、主郭部の東方を防御し、藤木坂、野々垣口を固める重要な曲輪群である。

八上城が落城したのち、丹波を治めた光秀も天正10年(1582)本能寺の変を起して滅亡、以後、豊臣政権下の大名が多紀郡を治め、前田氏の時代に北麓の春日神社一帯に居館が構えられた。慶長13年(1608)、徳川家康の実子といわれる松平康重が多紀郡を与えられ、八上城は主郭部を中心に改修されたようだ。しかし、家康は新たに篠山城を築いたことで八上城はその歴史を閉じた。とはいっても、八上城は戦国時代初期から後期、さらに近世城郭の発祥期までの歴史を刻む、山城遺構として貴重な存在である。

## 戦国山城の群集地—丹波篠山

中世、丹波国多紀郡であった篠山市には、八上城跡をはじめとして、約70以上の戦国山城が残っている。それぞれの山城の規模、保存状態、城史などはさまざまだが、いずれもその土地の戦国史と密接な関わりを有している。

八上城跡を訪ねられたのち、それらの山城にも足をのばし、丹波篠山の戦国時代に思いをはせていただきたい。

## 波多野氏戦国年表

15世紀後半	波多野(吉見)清秀、応仁の乱の功により細川政元から多紀郡小守護代に補任される。
永正5年(1508)	波多野元清、酒井氏、中沢氏ら多紀郡内の澄元派勢力を誅して多紀郡を制圧。(細川二流の乱)
大永6年(1526)	元清、弟の柳本賢治とともに高園から離反、高國勢を撃退。
天文3年(1534)	波多野秀忠、内藤氏に代わって丹波守護代として活動。
天文13年(1544)	秀忠、山科言継日記に「丹波守護」と記される。
天文21年(1552)	波多野元秀、三好長慶に八上城を攻撃される。
永禄2年(1559)	元秀、八上城を退去。
永禄9年(1566)	波多野秀治、八上城を奪還。多紀郡の失地回復に奔走。
永禄11年(1568)	織田信長上洛。波多野秀治、荻野(赤井)直正ら信長に誼を通じる。
元亀元年(1570)	波多野秀治、織田信長に太刀・馬を献じる。
天正3年(1575)	9月、明智光秀、信長から丹波攻めを命じられる。11月、光秀が黒井城の狭野直正を攻撃。
天正4年(1576)	1月、黒井城攻撃中の波多野秀治が寝返り、光秀は敗走。(赤井・波多野の呼び込み軍法)
天正5年(1577)	10月、明智光秀、細川藤孝らと再び丹波に兵を進める。羽井城落城、細工所城降伏。光秀、八ヶ岳山上に藤坂城を構築。
天正6年(1578)	3月、黒井城主荻野直正が病死、享年五十歳。光秀、細川藤孝らと多紀・氷上両郡に残る城砦を攻撃。
天正7年(1579)	6月2日、八上城落城。波多野秀治兄弟安土で処刑される。8月9日、黒井城を攻め、赤井忠家を降す。
天正8年(1580)	明智光秀、織田信長から丹波一国を与えられる。
天正10年(1582)	6月2日、明智光秀、山城国木能寺に織田信長を襲い殺害する。(木能寺の変)6月13日、山崎の合戦で光秀敗死。

## 参考文献

- 『戦国・織豊期城郭論』八上城郭研究会 2000年
- 『八上城・法光寺城跡調査報告書』篠山市教育委員会 2003年
- 『日本城郭体系』第12巻 大阪・兵庫 新人物往来社 1982年
- 『兵庫県の中世城館・莊園調査』兵庫県教育委員会 1982年
- 『ひょうごの城』『八上城』 神戸新聞総合出版センター 2011年
- 『兵庫県史』『龜山市史』など関係自治体史

